

# ビキニ被ばく悔しさ今も

## 幡多・高知市 元船員らの支援模索

米国によるビキニ環礁水爆実験で被ばくした元マグロ漁船員らの支援や平和の尊さを考える「ビキニデー in 高知」が5〜7日、幡多地域や高知市で行われ、元船員が今なお残る悔しさを訴え、支援者らは早期解決への道筋を探った。

5日に土佐清水市で開かれた集会では、元船員の谷脇寿和さん(88)＝同市下川口＝が証言。実験が行われた1954年に周辺海域で操業し、スコールで体を洗ったり、命がけで取った魚を廃棄したりした経験を振り返った。「実験の光を見たのに、僕らには何も知らせてくれなかった」「国は事実をないがしろにした。残念

「でならない」と悔しさをにじませた。

6日は、同市内で戦争遺跡に触れるフィールドワークなどをした後、四万十市で会合が行われた。幡多高校生ゼミナール＝OBの40〜50代4人が登壇。高校生の頃、元船員や韓国の元従軍慰安婦女性に話を聞いた経験を報告し、「地元の隠された歴史を深く知った」「民間レベルでの、人と人の交流がいかに大切かを学んだ」などと、活動の意義を語った。

7日には高知市で全体集會を開催。マージナル諸島の核被害を調査する明星大の竹峰誠一郎教授(46)が講演し、高知の訴訟では被ば



ビキニ周辺海域での操業時の体験や思いを語る元船員の谷脇寿和さん＝右(土佐清水市足摺岬のホテル足摺園)

被害を証明する必要がある」と紹介。「目の前の被害者をどう助けるか。被害者を援助する仕組みをもっとつくらなければいけない」と訴えた。

被害者の支援団体などでつくる実行委員会が企画。

くと健康被害の因果関係が争われているが、「世界では核被害の補償制度が確立され、必ずしも当事者が健康